

# JP 日本語版 —囁く森 (The Whispering Forest)

山々の奥深く、地図が途切れ、風が古の秘密をささやく場所に、若き探検家 ライラ (Lyra) が忘れられた道を進んでいた。

彼女は月光の下で囁く森の伝説を聞いたことがあった——光で語り合う木々の森。

そこへ入った者は、明確な記憶ではなく、夢だけを持ち帰るという。

祖母から受け継いだ古い護符と好奇心に導かれ、ライラは苔に覆われた石のアーチをくぐった。

その瞬間、森が息を吹き返した。

枝の間に光の糸が漂い、螢のように彼女の名を呼ぶ。

「——ようこそ、探す者よ...」

どこからともなく、しかしすべての方向から声が響いた。

葉が金と翠に輝き、風と共に模様が変化する。

森は謎を通して語りかけた。

それを解かねば、前へ進むことはできない。

最初の木が問いかけた。

「心が求めながらも見えぬものは何だ？」

ライラは考え、答えた。

「富ではなく...目的です。」

木はやさしく光り、輝く種を落とした。

さらに進むと、櫻の木々が彼女を囲んだ。

樹皮の上に次の謎が光った。

「分け与えても減らぬものは何？」

ライラは微笑み、言った。

「知識、あるいは希望。」

地面が震え、青い光の道が開かれた。

広場の中心には、静かな池の上に石が浮かんでいた。

その中には、暁の秘宝 (Artifact of Dawn) が輝いている。

手を伸ばす前に、最後の囁きが響いた。

「森の恩恵を受けるなら、その重みも背負う覚悟はあるか？」

ライラは目を閉じ、静かに言った。

「はい、受け入れます。」

すると根が彼女を優しく包み、石は光となって護符に溶け込んだ。

森は静まり、風が感謝を伝えるようにそよいだ。

それ以来、ライラはただの探検家ではなくなった。

彼女は——

**囁く森の守護者** となり、

地と光の狭間を旅する者として、満月の夜ごとに語り継がれている。